

## その他

# クリスティアン・ヴォルフの心身論 —二元論から一元論へ—

Christian Wolff's Mind-Body Theory : From Dualism to Monism

山本道雄

関西看護医療大学 一般教養

Michio Yamamoto

Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Liberal Arts

キーワード：心身問題, 心脳問題, 心物二元論, 身一元論

Keywords : Mind-Body Problem, Mind-Brain Problem, Mind-Body Dualism, Body-Monism

## I ヴォルフの心理学について<sup>1)</sup>

ヴォルフによる心理学研究はドイツにおける実験科学としての心理学の確立に決定的な影響を与えた。専門の学会誌の刊行はその領域が科学として社会的に認知された証拠であろうが、心理学の領域では1756年、つまりヴォルフ没後2年目に、ハレで刊行されたゴットロープ・クリューガーによる『実験心理学論』がこれに当たる(Gottlob Krüger, Versuch einer Experimental-Seelenlehre)。クリューガーはヴォルフの『経験的心理学』(Psychologia Empirica, 1732)の影響のもと、実験科学としての心理学の確立と発展に尽くした(Rumore, p. 194)。もしヴォルフが現代にまで続く個別科学の端緒に深く関わっているとすれば、それは心理学の領域においてである<sup>2)</sup>。

この小論ではそのヴォルフの心理学における心身問題に焦点を絞って考察したい。周知のように心身問題は近世哲学に限ってみてもデカルト以来の哲学上のアポリアである。ヴォルフはこの心身問題を当時の有力なパラダイムであった心物(物心)二元論という枠組みのもとで考察する。

以下ではまずヴォルフの心理学における心身関係論の位置づけについて考察する(Ⅱ～Ⅲ)。次いでヴォルフがその心身関係論を心物二元論の枠組みでどこまで整合的に展開しているか、この点を『経験的心理学』第2巻第2部第3章に即して確認したい(Ⅳ～Ⅴ)。またヴォルフの心身論

の議論には、これを存在者(ens)と存在者の関係をめぐる理論として捉えれば、心身論から相対的に独立しうる哲学的議論も含まれている。ヴォルフの心身論は哲学的議論として同時代のカントやヒュームの哲学議論と普遍的な議論領域を共有していることを強調しておきたい(Ⅵ)。心物二元論は今日ではもはや成立しがたい。しかし心身論自体は現代では心脳問題というかたちをとって継承されている。それではヴォルフの心身論は現代の心脳問題から見たときどのように評価されるか、それは単なる過去の遺物か、哲学史家として最後にこの点も検討しておかねばならない。ここではヴォルフの心物二元論は身(物)一元論に回収されうることが確認されるだろう(Ⅶ～Ⅷ)。

## Ⅱ 心身二元論

まず心身問題に対するヴォルフの基本的なアプローチの仕方を確認しておかねばならない。それをよく伝える文章が『理性的心理学』第531節注解にある。

心身関係の問題(quaestio de commercio inter mentem et corpus)はいつの時代にも哲学者によってもっとも難しい問題に数え入れられ、多くの人にはその結び目はまったく解きほぐしがたく思えた。結び目を解くことを断念し、観念論者や唯物論者のように、二つの実体のう

ちのひとつの存在を疑うことによって結び目を両断する哲学者たちもいた。観念論者は物体 (corpus) の存在を、唯物論者は非物質的実体としての心 (anima) の存在を否定した。観察によって確実であることをその仮説から説明することに努力し、われわれが真理を追究しているのかどうか、どの程度まで真理から逸脱しているのかが明らかになるように仮説の考案に全力を傾注するなら、哲学者はかくも困難な問題において自らの職責を果たしているのである。明確な真理がただちに提示されるのを要請する人は、人間に及ばないことを要求している。

ここで「観念論者」や「唯物論者」とされるのはマルブランシュやホッブスである (『理性的心理学』第 33, 38 節)。観念論や唯物論が一元論であるのに対して、二元論は「観念論者と唯物論者とが教えている 2 つのことを同時に受け取る」立場であり、「物」と「心」の 2 つの存在者を同時に認める。「物質的実体の存在と、非物質的実体の存在を認めるのが、二元論者」である (『理性的心理学』第 32, 39)。ヴォルフの心身論はこの二元論の枠組みにおいて展開される。いうまでもなくここでは身は corpus として、物質的実体と見なされる。

### Ⅲ ふたつの心身関係論

まずヴォルフのラテン語心理学における心身論の位置づけについて確認しておきたい。ヴォルフはふたつのラテン語心理学 (『経験的心理学』, 1732; 『理性的心理学』, 1734. なお山本の旧稿 (2022) では『合理的心理学』) のそれぞれで心身関係論を展開している。ひとつは上述の『経験的心理学』第 2 巻第 2 部第 3 章「心身の関係 (commercium mentis et corporis)」において、いまひとつは『理性的心理学』第 3 部「心身の関係」においてである。しかし双方の議論はまったく異なった枠組みで展開されている。

『経験的心理学』での議論は心身の相関を経験的に自明の事実として展開されている。その第 947 節では「著者の意図」という小見出しのもと、以下のように述べられている。

疑いを容れない経験 (indubia experientia)

によって確実であることに関してのみ心身関係について論じる。というのもわれわれは経験的心理学について論じているからである。経験的心理学では、心に関して経験によってわれわれに知られていることのみ認められるのだから、心身関係に関してもここでは疑いを容れない経験によって信頼できることだけを論じる。

この節の「注解」ではこれに、「したがってここで論じられることは一切の仮説から自由である」と続く。

これに対してさきに述べたように、『理性的心理学』第 3 部「心身の関係」は心身関係を説明する 3 つの「仮説」の紹介からなる。それら 3 仮説とは、「物理的影響の体系」、「機会因の体系」、最後に「予定調和の体系」である。これらはベイルの『歴史哲学批評辞典』(1696) を通じ、ヴォルフも含めて同時代の思想家にすでに知られていた (山本, 2022, p. 170)。

つまり心身関係論は、一方の心理学では心身関係についての経験に基づいた心理学的分析である。これに対して他方の心理学で心身関係論は心身関係についての 3 つの「仮説」の紹介である。双方の心理学は編別構成のうえでほぼ対応しているが、心身問題に関してはこの対応が崩れる<sup>3)</sup>。以下では『経験的心理学』第 3 章の「心身関係」論の内容に立ち入らねばならないが、その前にまず「心」についてのヴォルフの規定を確認しておくべきだろう。

### Ⅳ 「心」についてのヴォルフの規定

まず『経験的心理学』での「心」の定義から見ていきたい。その第 20 節「心の定義」に次のようにある。

われわれのうちにあって、われわれ自身とわれわれの外部のものを意識している存在者が心 (anima) と呼ばれる。それはまた人間の心 (anima humana), あるいは精神, あるいは人間の精神 (mens humana) と呼ばれる。

ヴォルフによればこの定義の「実在性」は「ア・ポステリオリ」に明らかである。

というのもわれわれはこれまで、自らと、われわれの外部の他のものとを意識しているものが、われわれの内に存在するのを見てきたからである。経験的心理学で学ぶのはこの存在者(ens)についてである。」(第20節注解)

これに対してヴォルフは、「この存在者が何であるか、身から区別されるものが何であるかは、『理性的心理学』で教える」という(同上)。ではその『理性的心理学』での「心」の規定はどうか。その第66節「心の本質(essentia)は何か」には次のようにある。

心の本質は質料的には(materialiter)世界における身の位置に応じて宇宙を表象する力(vis repraesentativa)にあり、形式のうえで(formaliter)制約されている感覚器官の組織(constitutio)にある。この表象力こそが心に関して理解される最初のものであり、心に属する自余のものはこれに依存する。

なおうえの「身の位置に応じて」という句は、心という「非物質的存在者」がその存在において身体に限定されていることを示している。これがヴォルフにおける心身関係論のもっとも抽象的な端緒である。

## V 『経験的心理学』第3章「心身の関係」

以下では『経験的心理学』第3章「心身の関係」の内容の考察に移りたい。

### 1 第948節～第952節 身に対する心の関係

『経験的心理学』第3章「心身の関係」では、まず第948節から第952節にかけて、身に対する心の関係が、次いで第953節から第960節にかけて心に対する身の関係が説明され、最後にこれらの議論をうけて第961節から第964節にかけて「身と心の結合」が結論される。

第948節の小見出しは「心の変容(mutatio mentis)は感覚器官における変容に依存する(pendere)」とある。「外的対象が正常な感覚器官に作用(agere)すると、その瞬間(eo ipso momento)、心にその外的対象をわれわれの外部に存在するとして表象する知覚(perceptio)も

生じる。」ここでは身としての感覚器官と「知覚」という心の変容の対応関係が論じられている。感覚器官に作用するものとはここでは「光」である。光は目に変容を引き起こす。「目に変容が生じると心に知覚が生じる。」しかし目における変容が止むと知覚も消える。ヴォルフによれば、「目に生じる変容と、心に生じる変容のあいだのいかなる時間的間隔(intervalum temporis)も知覚されない。」この時間的間隔は経験によっては定かに確定することはできない。視覚について述べられたことは味覚、臭覚、聴覚についても妥当する(第948節)。

### 2 感覚器官と心における変容の共存存在(coexistentia)

第949節では「感覚器官と心における変容の共存存在」の観察可能性が問題になる。それによると変容の共存存在自体は経験可能であるが、その「仕方」(ratio)は観察されない。第949節全文を引用する。

感覚器官と心における変容の共存存在は観察されるが、しかしその仕方(ratio)は、とくに心に対する身の作用(actio)は決して観察されない。感覚器官と心における変容をわれわれは同じ瞬間に、あるいは同時に意識し、われわれの知覚に注意を払うことでそれらが共存存在することを認識し、かくてそれらの共存存在を経験する。しかしどれほど注意しようとも、なぜ心の変容が感覚器官における変容に共存存在するかが理解できる何ものもわれわれは意識しないし、かくていかなるその仕方(ratione)もわれわれは経験しない。とくに心に対する身のいかなる作用も意識しないし、したがってこの作用を経験していない。

「心に対する身のいかなる作用も意識しない」とあるのは、文字通りこの作用が意識されないことを意味する。つまり心身の相互作用そのものは「疑いを容れない経験」に入らない。ヴォルフにとって「疑いを容れない経験」に入るのはこの心身の相互関係、あるいは「感覚器官と心における変容の共存存在」である。この「共存存在」は「観察」されるが、その「その仕方、とくに心に対する身



の作用は決して観察されない」。この意味で心身の相互関係とはヴォルフではたんなる共存在あるいは対応関係である。あるいは「調和」である。『理性的心理学』第541節では「心身の調和は仮説か」という小見出しのもと次のようにある。ここに「調和」とは「共存在」のことである。

心身の調和が存在するのは明白だから、またそれを誰も疑うことはできないから、さらに哲学的仮説とは実際にその通りであるかどうかまだ証明されていないことを想定するものだから、心身の調和は哲学的仮説ではない。

この一節はライプニッツの予定調和説からのヴォルフの自立を明白に伝えるものとして重要である<sup>4)</sup>。これに続く「注解」には、「心身の調和と予定調和とを混同する人は大変な間違いを犯している。調和の予定が仮説であって、調和そのものが仮説であるのではない」とある。

つまり『経験的心理学』の議論はあくまで「疑いを容れない経験」の範囲に収まるのであって、その経験とは「心身の調和」あるいは心と身における変容の「共存在」である。この共存在がいかに可能であるかを論じるのは「仮説」に属する。さきに確認したように、この「仮説」は『理性的心理学』で論じられる。

### 3 身の苦痛等の知覚

続く2つの節では感覚ではなく、血流や神経流のような、心に対する身的要素の影響が論じられる。これは心身相関の議論によりも、むしろ伝統的には情念論に属するテーマであろうが、念のため一応紹介しておきたい。「心は身の苦痛、無気力、疲労を知覚する。これらはきわめて明晰であり、誰にでも理解できるものだから、説明のための例は必要ない。」(第951節)「身における流動体の異常な運動の心における知覚」という小見出しのもとでは「血液」や「神経流」が登場する。「血液や神経流が異常な仕方で運動するとき、心にはいわば錯乱のような混雑した知覚があり、運動が止むとこれも止む。とくに激しい怒りや恐怖に際して観察されるように、心が情動(affectio)によって動かされるときに、この激しい血流や神経流の運動が身に現れる。」(第952節)後に見る

心脳問題においては「身」は脳に局限化されているが、ここでは心は情動としての側面では身体全体との相関で論じられていることになる。

### 4 意思(voluntas)に依存している身の運動(motus)

第953節以下では、これまでと逆に、身に対する心の関係が、つまり心に依存する身の運動について論じられる。「心が欲するとき、身のある器官の運動がただちにそれに継起する。心が欲している間、運動は持続する。心が欲するのをやめるとき、運動も止む。」もちろん心が欲しても動かない身体部分はある。「心臓は絶えず運動している。しかし心臓は心が欲しても鼓動を止めない。」「頭髮は容易に動く。しかし心が欲しても頭髮を動かすことはできない。」(第953節)

なお「心が欲するとき、身のある器官の運動がただちにそれに継起する」とはいわゆる心的因果(美濃, 2004, p. 25)の問題である。これについてはのちにあらためて論じる。

### 5 身に対する心の作用は観察されない

「われわれは心の意欲(volitio)と身における運動との共存在を、同様に心の非欲(nolitio)と身における運動の中断との共存在を観察する。しかしそれによってこれらの運動が産出されたり維持されたり中断されたりする身に対する心の作用(actio)は観察されないし、なぜ心の指令(nutus)に従ってこれらの運動が生まれたり中断したりするのかその仕方(ratio)も観察されない。」(第955節)しかし身に対する心の作用が観察されないからといってそれが存在しないことにはならない(第956節)。

### 6 身に対する「意欲」ならびに「非欲」の関係

『理性的心理学』第540節では心における「意欲」ならびに「非欲」の、身に対する関係が次のように説明されている。

さらに心の欲求(apetitus)には身体と身体諸器官の運動が対応し(respondere)、心の嫌悪(aversio)には身体と身体諸器官の運動を妨げようとするコナトゥスが、あるいは運動の停止(omissio)が対応する。さらに欲求と嫌

悪には、身体における血液や神経の流れのさまざまな運動が対応する。――したがってこれらの運動や運動の停止は先行する欲求や嫌悪に依存するので、心にあるものから身体に生じる随意的運動や自発的運動が理解される。

## 7 心と身の相互依存

こうしてヴォルフは心に対する身の、身に対する心の相互関係を論じたのち、第961節で「心と身の相互依存 (animae et corporis mutua a se invicem dependentia)」について議論を進める。それによると、

知覚の特殊化と知覚が生起している時間に関しては、心は身に依存している。しかし身における随意的運動 (motus voluntarius) の種別化とそれら運動が生起している時間に関しては、身は心に依存している。というのも、感覚器官における変容からは心における知覚の種別化と、双方の変容が生起している時間の連続性が説明され、心における意欲からは随意的運動の種別化が説明され、これらが生起している時間の連続性が説明されるからである。したがってその理由が身から説明できるあることが心にあり、逆に、その理由が心から説明されるあることが身に生起するので、心は身に、身は心に依存している (dependere)。前者は知覚の種別化に関して、後者は運動の種別化に関して、また心身双方の実体はともに調和的変容の時間の連続性に関して、相互に依存しあっている。

## 8 心と身との相互関係

次いで第962節では同じ事態が「心と身との相互関係 (commercium mentis cum corpore)」として次のように説明されている。

知覚の種別化と、感覚器官における変容と同時に知覚が生じる時間の連続性の点での、身に対する心の依存と、随意的運動の種別化と心の意思と同時に生起する時間の連続性での、心に対する身の依存は、心と身との相互関係と呼ばれる。

ちなみにこの節に対する「注解」に、「この相

互関係がいかにかに成立しうるかは『理性的心理学』で探求する。そこでは身体において観察されることについて説明される」とある。つまり『経験的心理学』では心身の相互関係に関する「疑いを容れない経験」について記述され、それをうけて『理性的心理学』ではその経験の成立可能性の根拠 (ratio) あるいは仕方が説明される。これは心身の相互関係の記述と説明に関して、ヴォルフが自らの哲学の理念として標榜する「理性と経験の一致」が実現されていることを意味する。

## 9 身と心の結合 (unio mentis cum corpore)

こうして当初は心物二元に立ち、「世界における身の位置に応じて宇宙を表象する力」(『理性的心理学』第66節)として抽象的に規定された身と心の関係は、「相互依存」、「相互関係」と規定を重ねてきて、第963節で「身と心の結合」という規定を得ることになる。

身と心の相互依存関係から、心は身に、身は心に属する (pertinere) ことが理解されるので、したがって心に関してこの身をわれわれの身体と呼ぶのと同じように、身に関してわれわれはこの心をわれわれの心と呼ぶのだから、双方の存在者はひとつの複合的実体 (substantia composita) を構成すると結論され、したがって心と身は結合されている (mens cum corpore unita) とわれわれはいう。

## VI 共存在・恒常的相伴・因果関係・必然的結合

以上、心身関係についてのヴォルフの議論を追ってきた。さきに進むまえにこれらの議論に含まれる哲学的な論点を取り出しておきたい。

第1に、心身問題はデカルト以降に限定してみれば、拮がりのない心と拮がりのある身とがどのように影響しあうかという、デカルトの心物二元論に対するエリザベト王女の問題提起に端を発する。デカルトはこの問題に、「心身の合一 (union)」を「知性」、「延長」とならぶ第3の「原始的観念 (notions primitives)」と見なすことで応えた (小林, 1995, p.446) <sup>5)</sup>。

うえの『経験的心理学』での「心身の相互関係」に関わる一連の議論は、このエリザベト王女問題

に対応するものと解釈できる。それはデカルトが自明の「原始的観念」として要請した「心身の合一」の観念を、「心と身の結合」として、ヴォルフ的な論証スタイルで導出したものと見ることもできるだろう。事実、さきに紹介した第 961 節の最後には、「よって論証された (per demonstrata)」という句がおかれている。

その議論は微妙な言い回しからなる。その理由は心身の直接の「作用」関係自体は「疑いを容れない経験」に入らない一方、「感覚器官と心における変容の共存在」(第 949 節)は、「疑いを容れない経験」の範囲に入る。ヴォルフの議論はこの範囲に収まるようにして注意深く進められているからである。

第 2 に、うえで紹介した「心身の相互関係」の議論に立ち入らねばならない。V の 1 から 9 までの議論で主張されていることは、「感覚器官における変容」つまり身体の変容があれば「知覚」つまり心の変容があり、「意思」つまり心の変容があれば身体の変容が生起するということである。つまり「身体の変容」⇒「心の変容」であり、かつ、「心の変容」⇒「身体の変容」という事態である。これは論理的に言えば「身体の変容」と「心の変容」は双条件法の関係にあることを意味する。

しかし問題はこの双条件法から「心と身の結合 (unio mentis cum corpore)」を結論することができるか否かにある。ヴォルフの議論で妥当に結論できることは、「身(心)の変容があるところ、かつそのときに限って、心(身)の変容もある」ということだけある。これを「結合」と言い換えても、そこでいわれていることは正確には心と身の共存在関係以上の事態ではない。

第 3 に、この双条件法をヴォルフの言葉で端的に表現すれば、「その理由が身から説明されるあることが心にあり、逆に、その理由が心から説明されるあることが身に生起する」(『経験的心理学』第 961 節)という文に要約される。ではこの事態はどのように解釈されるべきか。この関係は因果関係だろうか。「依存する (pendere)」という言葉の使い方からすればそのように解釈することができる。しかしこの解釈には難点もある。それは心身の「作用」関係は認識されないと指摘されている点である(『経験的心理学』第 949 節)。認

識(経験)されるのは「共存在」関係だけであって、ここから因果関係が認識されるとするのはいわゆる「取り違えの誤謬 (vitium supreptionis)」(山本, 2010, 索引参照)による。

しかしこの「共存在」は一回のものではなく、恒常的關係である。では共存在の恒常的關係から因果関係を推理できるか。ヒュームであればこの推理に異議を差し挟むに違いない。ヒュームによれば原因の知覚と結果の知覚の恒常的相伴からは「必然的結合」の「印象 (impression)」は得られない、得られるのは必然的結合の「観念 (idea)」のみである(ヒューム, 「探求」, 第 7 節「必然的結合の観念について」)。さらにカントは、恒常的相伴から因果の「必然的結合」を推理するには、ア・プリオリの因果「カテゴリー」が前提されねばならないことを示した(山本, 2010, 第 8 論文)<sup>6)</sup>。

しかし注目すべきことにヒュームやカントを引き合いにだすまでもなく、実はヴォルフ自身が『経験的心理学』(1732) 第 113 節で、継起する諸知覚について次のように述べている。

多くのものがしばしばあるいは長時間、同時に知覚されると、それらの知覚は相互に連関 (conectere) づけられる。というのも多くのものがしばしばあるいは長時間知覚されると、心は一方の知覚から他方の知覚を容易に再生する (reproducere) ようになるからである。

これに続けて第 114 節にはこうある。

それらのうちの一方が他方から産出 (producere) されるものについての諸知覚は、それらのものがしばしばあるいは長時間知覚されるがゆえに連関しているのだから、しかしなぜ知覚されたものが同時に存在するか、あるいはなぜ相互に継起するかはそのことから理解されないのであるから、したがって一方のものに他方のものの共存在の根拠や他方のものの継起の根拠は含まれていないのであるから、ものの知覚が心において関連しているからといって、ものが相互に連関している訳ではない<sup>7)</sup>。

これはまさしくヒュームの『人間知性研究』(1758)での因果観念の分析と同種の議論であ



る。しかもこのヴォルフの主張がヒュームの主張に16年先行していることに留意されるべきだろう。ここではヴォルフ、ヒューム、カントの議論が微妙に交差している。「独断論者」と誤ってレッテルを貼られてきた分析家ヴォルフの真骨頂がここに認められるのであるが、遺憾ながらこの点は久しく無視されてきた<sup>8)</sup>。

## VII 感性的観念と質料的観念

それでは第5節でのヴォルフの議論はどこまで成功しているだろうか。この点を以下では『経験的心理学』と『理性的心理学』における「感性的観念」と「質料的観念」の議論に即して立ち入って確認しておきたい。

まず「感性的観念」と「質料的観念」の規定から見ておかねばならない。

感覚(sensatio)によって心に存在するもの、あるいは感覚器官において変容が生じる(accidere)がゆえに心に実際に存在するものを、感性的観念(ideae sensuales)と呼ぶ。したがって感性的観念とは感官(sensus)によって心において産出されるものということができる。『経験的心理学』第95節

つまり感覚的对象によって「感覚」(身)が変容を受けることで、「心」に「感性的観念」が存在する。次に、

感覚的对象によって感覚器官に刻された運動(motus)を今後われわれは形相印象(species impressa)と呼ぶ。その運動から脳(cerebrum)にまで達する運動、あるいはその運動によって脳に生じる運動を質料的観念(idea materialis)と呼ぶ『理性的心理学』第112節

つまり質料的観念とは、感覚的对象によって感覚器官に刻された運動から「脳」にまで達する運動のことである。あるいは端的にそれは、「脳に生じる運動」、脳に存在する観念である。

かくて「感性的観念」は「心」に関わり、「質料的観念」は「脳」に関わる。「脳」は身の一部である。『理性的心理学』第113節「感性的観念

と質料的観念の共存在」には次のようにある。

感覚神経に刻された運動が脳にまで達しなければ心には対象の感覚的知覚は存在しないのだから、感性的観念には脳における質料的観念が共存在する。

しかし質料的観念と感性的観念はたんなる「共存在」ではあるまい。「感覚神経に刻された運動が脳にまで達しなければ心には対象の感覚的知覚は存在しないのだから」、感性的観念には脳における質料的観念がたんに共存在するだけではなく、後者のゆえに前者があると理解されるべきだろう。

しかし物質的存在としての「脳」に存在する質料的観念と、非物質的存在である「心」に存在するとされる感性的観念とは、どのように関わるのか。双方が1 vs 1に対応するとしても、質料的観念という物質的存在 — 脳という物質に存在する観念である以上、質料的観念は物質的存在であろう — がいかにして非物質的存在である心に、感性的観念を産み出しうるのだろうか。「感覚神経」を媒介にしてということも考えられる。しかし非物質的存在としての心に、物質的存在としての感覚神経はいかに作用するのか。この作用のためには、双方の接触が求められるであろう。しかし「接触ということは{心という}非物質的なものとは両立しない」(既出、エリザベト書簡、注5参照)のである。

こうして心物二元の構図が、「心」における「感性的観念」と「脳」における「質料的観念」となって再現され、のみならず、これらの2つの観念のあいだに、エリザベト王女によって指摘されたと同種のアポリアも再現されていることが分かる。さきに見た「相互関係」から「結合」に至るまでのヴォルフの議論は、本来はこのエリザベト王女によって指摘されたアポリアに應えるはずのものだった。しかし感性的観念と質料的観念をめぐる議論がふたたび同種のアポリアに遭遇していることは、この問題が解決されていないことを意味する。あるいは解決されえないことを意味する。その根本的理由はその議論が心身の二元論を前提にしているからである。

しかし翻って考えてみれば、デカルトの「心身

の合一」の「原始観念」にしても、エリザベト問題に真に応えるものではなかった。それは心物二元を前提にしたうえで、「合一」という観念のもとに問題を先送りしたにすぎない。「合一」が「原始的観念」として要請されたにせよ、これは「精神」と「物質的なもの」とのあいだに「接触」が成立しようと要請しているようなものである。

したがってこの問題の解決は心身二元論の放棄を俟つしかない。背理法によればある議論から矛盾が帰結すればその前提群のうちのひとつは否定される<sup>9)</sup>。これと類比的な事態がここに認められる。あるアポリアを解決すべき議論が同種のアポリアに遭遇している以上、その議論の前提に問題があるといわざるをえない。このアポリアを回避するには問題となる前提を否定する他ない。ここではそれは心物二元論である。

あるいはさきのヴォルフの言葉を、ヴォルフの意図に反してであるが、援用すれば、これは「結び目を解くことを断念し、観念論者や唯物論者のように、ふたつの実体のうちのひとつの存在を疑うことによって結び目を両断する」ことを意味する。両断の帰結は「心」の座を「脳」という物質に見る、唯物論的な身一元論である。

以下ではヴォルフの心身論がどこまで身一元論のもとに回収可能かを、現代の心脳論との連関で考察せねばならない。

## VIII 心的因果の問題

さきに「心が欲するとき、身のある器官の運動がただちにそれに継起する」(『経験的心理学』第953節)とは、いわゆる心的因果に相当することを指摘しておいた。ここで「心的因果」とは、心が身に因果的作用を与えることを意味する。例えば喉の乾きという心的状態が原因となって「水を飲む」という身体的行動を引き起こすと考えるとき、そこに心的因果が想定されている。しかし金杉のいうように、心が原因となって身的運動を惹起するとすれば、これはいわば「念力」によって身体を動かそうとするようなもので、明らかに不合理である(金杉, 2007, p.36)。あるいは美濃のいうように、心的因果を認めれば、心的状態という「いかなる物理的エネルギーをもたない事象がいくらかの物理的エネルギーをもつ事象(身体的行動)を引き起こしうること」を認めなければなら

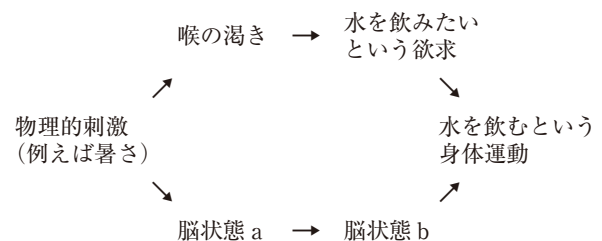
なくなる。」(美濃, 2004, p.69) これもまた不合理である。さきに紹介した文から明らかであるように、ヴォルフの議論にはこの心的因果の作用が想定されている。

しかし「感性的観念」、「質料的観念」、「脳」に関わるうへの議論から、ヴォルフではこの心的因果の問題が事実上解消されうる構成になっていることが分かるだろう。そこでこの議論から特定の対象を指示するかのように読める「心」という語を、文脈的に解釈することで削除することが可能だからである。換言すれば、ヴォルフの心身二元論は身一元論に還元可能である。例えばうへの『理性的心理学』第111節「感覚しているときの身体の変容」には次のようにある。

心が感覚しているとき、感覚的对象(objectum sensibilis)から感覚神経に刻印された(impressus)運動は脳にまで達する。・・・解剖学の教えるように、聴覚器官からの聴覚神経のように、さまざまな感覚器官から神経が脳にまで伸び、脳から運動神経が人間身体の個々の部分に広がっていく。

ここでは冒頭、「心」という語が用いられているが、さきに注意したように、「心」についての立ち入った説明はなく、記述されていることは、「感覚的对象」→「感覚神経」→「脳」→「運動神経」→「人間身体」という一連の流れである。ここで「心」は何か特定の存在者を指示する言葉ではなく、それは「感覚的对象」→「感覚神経」から「人間身体」に至る一連の流れとして文脈的に定義されうるものである。そこには「心」という語によって指示されこの流れから区別される、特別の存在者を想定する必要はない。

この一連の流れを金杉を参照にして図解すれば、



となる(金杉, 2007, p.42)。「喉の渇き」→「水



を飲みたいという欲求」→「水を飲むという身体行動」が心的因果の系列である。「脳状態 a」→「脳状態 b」はこれを脳 {身} のレベルで捉え直したものである。ここでは心的因果は解消されている。

「心」が感覚するということと、「感覚の対象から感覚神経に刻印された運動は脳にまで達する」ことは区別されるのだろうか。「感覚する」ということ自体、感覚器官という「身」的なものによる刺激の受容にもとづく。この刺激の受容が「脳」に伝達されて対象の知覚が生じる。この対象の知覚は「質料的観念」のことであり、これは脳に存在する。つまり一連の流れのなかに、身体的なものから二元的に区別される「心」は必要ない。

このように見るとヴォルフが固持した心物二元論の枠組みは、身一元論に回収されうることが分かる。のみならずヴォルフの「心」概念自体が、たんに拡がりのない存在者という抽象規定に尽きるのではないことに注意したい。

## IX 「心」の座としての「脳」

ヴォルフでは「心」は「実体」である（『理性的心理学』第 48 節）。「実体」とは「持続可能で変容可能なもの」である（『ラテン語存在論』第 768 節）。さらに心は「表象力」である。「心は同じ力で、感覚し、想像し、記憶し、回想し、注意し、反省し、概念を形成し、判断し、推理し、欲求し、嫌悪し、意思し、意思しない。」（『理性的心理学』第 61 節）。

こうしてみるとヴォルフにあって「心」はもはやたんに拡がりのない存在者という抽象的規定に留まりえないことが分かる。ヴォルフの時代には心理学を自然学の一部と考える立場があったと伝えられるが、この見方によれば、「心」は「物質」と並び立つ存在者である（Klemme, 1995; 山本, 2010, p.364）。しかし先に見たように、「心」という語によって指示される非物質的存在者は何もなく、それが「脳」を含む語によって文脈的に定義されるのであれば、「心」の座は「脳」という物質に求められる他ない。脳はうえて確認したような実体として心の座に他ならない。ここに現れるのは唯物論的な身一元論である。

前述のように、心物二元論は心身問題を論じる際のヴォルフの時代のパラダイムであった。「非

物質的実体」としての心という観念は、宗教的背景は別として<sup>10)</sup>、科学史から類比的な例をとれば、かつて燃焼を説明するために導入された「フロギストン」や、光の伝播を説明するためにその媒質として導入された「エーテル」のような、虚構の存在者であったということもできるだろう。ヴォルフの心身論を整合的に解釈すれば非物質的存在としての心という虚構の存在者は失権する。この点では心身二元論に立つヴォルフの心身論は失敗した。他方ヴォルフにあって心は身一元論に回収されることで、現代の心脳論に繋がりをうる。この点にヴォルフの心身論の可能性と先駆性があったことを示すのが、本稿の最終の目的であった。

## 【注】

- 1) 本論考は、山本（2022）の続編であるが、内容的には独立している。
- 2) この点についていくつか補強すれば、Hatfield, 1990, 1995; Goubet, 2018; Rumore, 2018. 「標準的な文献紹介によれば、ヴォルフは心理学前史における形而上学的過去の人物であるが、実のところヴォルフの仕事は 18 世紀およびそれ以降の心理学の展開にとって圧倒的に重要なのである。」（Hatfield, 1995, p. 197）
- 3) 双方の心理学の関係については、山本, 2010, 第 14 論文 p. 372 以下参照。
- 4) ヴォルフと予定調和説との関係については、山本, 2022. その影響関係はあまり強調されるべきではない。晩年のヴォルフはある書簡で、ライプニッツの体系は自分の体系が止むところで始まると述べているが、この言葉についてのもっとも説得的な解釈としてカルボンチーニは、次のアルントの言葉を紹介している。それによると、ライプニッツの予定調和説はヴォルフによって完成された体系の基礎にあるのも、その根拠付けの連関中にあるのでもなく、この体系の根拠と経験からせいぜい蓋然的な仮説として証明されるにすぎない。Carboncini, 2008, Vorwort zu *Christian Wolff Gesammelte Schriften*, Abt. III, Bd. 113, S. 11.
- 5) エリザベトのデカルト宛書簡に次のようにある。「あなたは精神の概念から延長を完全に排除なさっていますが、接触ということは非物質的なものとは両立しないと思います。」（山田弘

- 明訳『デカルト・エリザベト往復書簡集』2001年、講談社、p.14)
- 6) ヒュームとカントは、ダーウィンに先行する世紀の思想家として、いわゆるデザイン論証の問題に関しても興味ある論点を提示している。この問題については、山本、2003、2006年参照
- 7) なお「ラテン語論理学」(1728) 第702節には次のようにある。「あるものが恒常的に結合されている (constanter conjungunter) ことから、あるものが別のものの原因であることは蓋然的にしか推理できない。それは反証例が現れないかぎりでのことである。というのも恒常的に結合されているものも、双方のうちのひとつが他のものの原因であるか、あるいは双方とも同じ原因に依拠しているか、あるいは共存している諸原因に依存しているか、あるいはそれは偶然に結合されているかであるが、このことは存在論で論証されるべきであるが、ここでは経験に合致することとして受け入れておく。したがって“A と B は恒常的に結合されている。ゆえに A は B の原因である」と推理する人は、推理されてはならないことを推理している。」ここにも因果概念の分析においてヒュームに先行するヴォルフがいる。「ドイツ語論理学」、p.204、山本訳注参照。
- 8) ヴォルフは当時の全ヨーロッパの知的世界に強い影響を与えたが、19世紀後半からヘーゲルの影響もあって、誤ってライプニッツのエピゴーネンと見なされるようになった (Carboncini, 2018, S.467ff.). ヒンスケによれば、それは「信じられないほどの過小評価」(Hinske, 1999, S.99) であった。ヴォルフの哲学が正当に評価されはじめたのは、その著作類が組織的に刊行されはじめた20世紀後半からである。
- 9) 「仮定されたある式  $\Gamma$  から、他の前提のもとに (ない場合もある)、ある式  $\Delta$  とその否定式  $\sim\Delta$  とが導出されるならば、仮定された  $\Gamma$  の否定式をその前提のもとに結論として導出できる。」矛盾を  $\Delta \cdot \sim\Delta$  で表記すると、否定導入「背理法」は、 $A, \Gamma \vdash \Delta \cdot \sim\Delta$  ならば  $A \vdash \sim\Gamma$ 、と表現できる。木村慎哉・常俊宗三郎・安井惣二郎・山本道雄・吉田六弥『論理学』、晃洋書房、p.54参照。なおヴォルフの「ドイツ語論理学」、第14章第4節、ならびに記者注

も参照。

- 10) 宗教的背景は「ドイツ語形而上学」序論 (とくに第1版、第2版序論) で言及されている。ヴォルフではそれはキリスト教的伝統に結びつく。心を身と区別された存在者と見る伝統は例えばプラトン哲学に認めることができるだろう (『パイドン-魂について』、中央公論社「世界の名著」、第6巻)。しかし総じて古代ギリシア哲学にあつては“プシュケー”は物質的なものと見なされていたようである。風の強い日の葬儀は魂が吹き飛ばされるとして嫌われたと伝えられている。

## 【文 献】

- Arnaud, Thierry (2002). Le critère du métaphysique chez Wolff, Pourquoi une Psychologie empirique au sein de la métaphysique? in: *Archives de Philosophie*, Tom 65.
- Carboncini, Sonia (2008). Vorwort zu *Christian Wolff Gesammelte Schriften*, Abt. III, Bd. 113, S. 11.
- Carboncini, Sonia (2018). Wolffrezeption in Europa, *Handbuch Christian Wolff*, in: Robert Theis, Alexander Aichele Hrsg. Springer
- Correspondance entre Descartes et Elisabeth. 『デカルト＝エリザベト往復書簡』, 2001, 山田弘明訳, 講談社
- Feuerhahn, Wolf (2002). Comment la psychologie empirique est-elle née? in: *Archives de Philosophie* Tom 65.
- Goubet, Jean-François (2018). Rationale Psychologie, in: *Handbuch Christian Wolff*, in: Robert Theis, Alexander Aichele Hrsg. Springer
- Hatfield, Gary (1992). Empirical, Rational, and Transcendental Psychology, Psychology as Science and as Philosophy, in: *The Cambridge Companion to Kant*, 1992.
- Hatfield, Gary (1995). Remaking the Science of Mind Psychology as Natural Science, in: *Inventing Human Science, Eighteenth Century Domain*, by Christopher Fox, Ray Porter and Robert Worker, University of

- California Press
- Hinske, Norbert (1999)。Wolffs empirische Psychologie und Kants pragmatische Anthropologie Zur Diskussion über die Anfänge der Anthropologie im 18. Jahrhundert, in: *Aufklärung* 11/1, 1999.
- Hume, David (1758). An Enquiry Concerning Human Understanding, 神野慧一郎・中才敏郎訳, 『人間知性研究』, 2018, 京都大学学術出版(「研究」)
- Kanesugi, Takeshi (金杉武司) (2007, 2018), 『心の哲学入門』, 勁草書房
- Klemme, Heiner F. (1995). Kants Philosophie des Subjekts, systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis, Felix Meiner Hamburg
- Kobayashi, Michio (小林道夫) (1995). 『デカルト哲学の体系』, 勁草書房
- Mino, Tadashi (美濃 正) (2004). 心的因果と物理主義, 『シリーズ 心の哲学 I 人間篇』, 信原幸弘編, 勁草書房, 所収
- Rumore, Paola (2018). Empirical Psychology, in: *Handbuch Christian Wolff*, Robert Theis, Alexander Aichele Hrsg. Springer
- Wolff, Christian (1712). Vernünfftige Gedanken Von den Kräften des menschlichen Verstandes Und Ihrem richtigen Gebrauche in Erkenntnis der Wahrheit, in: *Christian Wolff Gesammelte Werke*, Abt. 1, Bd. 1, Georg Olms Verlag. 1978 (「ドイツ語論理学」)
- Wolff, Christian (1719). Vernünfftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, in: *Christian Wolff Gesammelte Werke*, herausgegeben und bearbeitet, von J. Ecole, H. W. Arndt, C. A. Corr, J. E. Hoffmann, T. Thomann, H. W. Arndt, 1. Abteilung · Deutsche Schriften, Band, 2 (「ドイツ語形而上学」)
- Wolff, Christian (1728). Philosophia Rationalis sive Logica Pars II, in: *Christian Wolff Gesammelte Werke*, herausgegeben und bearbeitet von J. Ecole, H. W. Arndt, C. A. Corr, J. E., Hoffmann, T. Thomann, H. W. Arndt, II. Abteilung · Lateinische Schriften, Band, 1, 2 (「ラテン語論理学」)
- Wolff, Christian (1729). Philosophia Prima sive Ontologia, in: *Christian Wolff Gesammelte Werke*, herausgegeben und bearbeitet von J. Ecole, H. W. Arndt, C. A. Corr, J. E. Hoffmann, T. Thomann, H. W. Arndt, II. Abteilung · Lateinische Schriften, Band, 3 (「ラテン語存在論」)
- Wolff, Christian (1732). Psychologia Empirica, in: *Christian Wolff Gesammelte Werke*, herausgegeben und bearbeitet von J. Ecole, J. E., Hoffmann, H. W. Arndt, II. Abteilung · Lateinische Schriften, Band 5 (『経験的心理学』)
- Wolff, Christian (1734). Psychologia Rationalis, in: *Christian Wolff Gesammelte Werke*, herausgegeben und bearbeitet von J. Ecole, J. E., Hoffmann, H. W. Arndt, II. Abteilung · Lateinische Schriften, Band 6 (『理性的心理学』)
- Yamamoto, Michio (山本道雄) (1983). 『論理学』, 木村慎也・常俊宗三郎・安井惣二郎・山本道雄・吉田六弥, 晃洋書房
- Yamamoto, Michio (2003). 「ヒュームのデザイン論証 — カントとの比較において —」, 神戸大学大学院文化学研究科, 『文化学年報』, 2003年, 第22号
- Yamamoto, Michio (2006). 「カントと一八世紀啓蒙哲学 — 「わが上なる星しげき空とわが内なる道德法則」」, 岩波版カント全集別巻
- Yamamoto, Michio (2010). 『改訂増補版 カントとその時代 ドイツ啓蒙思想の一潮流』, 晃洋書房
- Yamamoto, Michio (2020). 『ドイツ啓蒙の哲学者若きクリスティアン・ヴォルフの知識体系論 ドイツ啓蒙思想の一潮流 3』, 晃洋書房
- Yamamoto, Michio (2022). 「クリスティアン・ヴォルフにおける心身論 序説」, 『愛知 (φ ι λ ο σ ο φ ι α)』, 神戸大学哲学懇話会, 第32号